



日本音楽教育学会ニュースレター 第81号

目次

1 学会からのお知らせ

1. 第51回大会 オンライン大会のご案内ーニュー・ボーダーレスをめざしてー 今川 恭子 2
2. 「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育支援プロジェクトチーム」の
取組みについて..... 齊藤 忠彦 3

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会からのお知らせ.....小川 容子 4
2. 第16回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう！」 今田 匡彦 4

3 音楽教育の窓

1. 〈連載〉音楽・教育・学校 (24)
「在るものは無いもの・・・」ーコロナ禍の下で考えたことー 杉江 淑子 5
2. 新型コロナウイルス感染症影響下での教育・研究機関等での取組み..... 6
3. オンライン・シンポジウム「コロナ時代のアート」報告..... 早川 倫子 7

4 会員の声

- 限られた状況でもできることを探して..... 阿部 綾梨 8

5 会員の新聞・近刊等紹介..... 9

6 報告

- 2020年度 日本音楽教育学会 第2回常任理事会 9

7 事務局より 12

[編集後記]

1 学会からのお知らせ

1. 第51回大会 オンライン大会のご案内—ニュー・ボーダーレスをめざして—

大会実行委員会委員長 今川 恭子

第51回大会は10月17日(土)、インターネット・ツール(Zoom)を用いたオンライン開催として実施いたします。ご参加いただけるのは事前申し込みをした会員のみです。一日のみの開催となること、開かれた開催方法をとれない事情をご理解、ご容赦いただいた上で、多くの会員がご参加くださることをお待ちしております。大会参加に関する詳細は「第51回大会オンライン大会専用Webサイト」(本誌p.12参照)をご覧ください。

新型コロナウイルス感染症の影響下で、「新しい生活様式」や「ニューノーマル」といった言葉が聞かれます。その一方で、対面コミュニケーションの重要性、「いま・ここ」を共有して伝え合うことの貴重さを多くの方々が身に染みて感じておられるに違いありません。音楽教育の実践と研究に携わる人々が一堂に会して交流できる日を心待ちにしつつ、今回のオンライン開催が有形無形の「壁」を越えるチャレンジになることにも、大いに期待したいと思います。この期待を込めて、大会実行委員会は大会のテーマを「ニュー・ボーダーレス」としました。

研究発表(口頭発表)は81件です。前例のない開催方法にもかかわらず、多くの発表申し込みをいただいたことに感謝いたします。常任理事会企画プロジェクト研究は、基調講演に益川弘如氏(聖心女子大学)をお迎えし、音楽科授業のこれからの学びを探究します。プロジェクト研究ワーキングチームが、困難な状況にもかかわらず果敢に現場研究を進めて準備中です。加えて会長諮問に基づく「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育支援プロジェクトチーム」による緊急プロジェクトも実施します。詳細は、大会プログラムをご覧ください。

スケジュールは以下の通りです。実行委員会一同、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【大会スケジュール】

10月17日(土)		
9:00~12:40	研究発表(口頭発表) ABCDEFGHIJKL	
12:40~13:30	昼食休憩	
13:30~13:40	会長諮問に基づく	ご挨拶 ニュー・ボーダーレスをめざして
13:40~15:00	緊急プロジェクト チーム企画	プロジェクト研究「予測困難な時代と音楽教育—新型コロナウイルス感染症の影響下において—」 企画・司会:伊野 義博 話題提供:齊藤 忠彦, 菅 裕, 高見 仁志, 津田 正之
15:00~15:10	入替/転換	
15:10~16:40	常任理事会企画	プロジェクト研究「小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の実践研究I—音楽づくり・創作における学びの探究—」 基調講演:益川 弘如 企画・進行:石上 則子, 佐野 靖, 市川 恵, 萩原 史織 話題提供:プロジェクト研究ワーキングチーム
16:40~16:50	入替/転換	
16:50~17:50	総会 (Zoom 開催)	

2. 「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育支援プロジェクトチーム」の取組みについて

プロジェクトチームリーダー 齊藤 忠彦

新型コロナウイルス感染症の音楽教育への影響は大きく、学校教育においては、特に歌唱の活動が制限されるなどの状況が続いています。コロナ影響下において3密対策を講じての音楽教育はどうあるべきか、アフターコロナを見据えた音楽教育のニューノーマルはどうあるべきかなど検討すべき課題は山積みです。本学会では、2020年5月に「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育支援プロジェクトチーム」を立ち上げ、次の(1)(2)(3)について検討を始めることになりました。

- (1) コロナ影響下における音楽教育に関わる情報共有
- (2) コロナ影響下における音楽教育の在り方の検討(特に学校音楽教育)
- (3) アフターコロナにおける持続可能な音楽教育の在り方の検討

(1)については、5月末に「新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育に関わる情報 Web サイト」を立ち上げ、「基本情報」「小・中・高等学校及び特別支援学校等の授業に関わる情報」「大学の授業に関わる情報」「参考情報」「情報交換」の五つのメニューを置いて情報を発信しています。「小・中・高等学校及び特別支援学校等の授業に関わる情報」には、学校臨時休業中に行われていたオンライン等を活用しての音楽の学びの継続に関わる情報や、学校再開後の3密対策を講じての音楽科授業に関わる情報などを掲載しています。「参考情報」には、楽器演奏時の飛沫可視化実験の結果など音楽関連企業が発信している情報を掲載しています。(2)及び(3)については、これからの活動となりますが、10月17日(土)に開催される「第51回大会 オンライン大会」において、「予測困難な時代と音楽教育—新型コロナウイルス感染症の影響下において—」と題しての「会長諮問に基づく緊急プロジェクト研究」を行います。Zoom を使った開催となりますが、会員の皆様のご意見をお伺いしながら論議を深めていきたいと思っております。

今後、本プロジェクトを推進するにあたり、会員の皆様から、コロナ対策に関わる情報をご提供いただいたり、ご意見をいただいたりするなど、皆様とともに検討を重ねていきたいと考えています。情報提供やご意見等は、本Webサイトの「お問い合わせ」からご一報ください。ご協力のほどよろしくお願い致します。



新型コロナウイルス感染症対策
音楽教育に関わる情報

ホーム ● 基本情報 ● 小・中・高等学校及び特別支援学校等の授業に関わる情報 ● 大学の授業に関わる情報 ● 参考情報 ● 情報交換

2020年5月27日

日本音楽教育学会では、新型コロナウイルス感染症対策「音楽教育支援プロジェクトチーム」を立ち上げ、次の(1)(2)(3)について取り上げる予定です。まずは、学校音楽教育を中心とした情報を共有することからスタートします。

<https://info.onkyou.com/>

<新型コロナウイルス感染症対策 音楽教育支援プロジェクトチーム>

◎齊藤 忠彦, ○伊野 義博, 菅 裕, 高見 仁志, 津田 正之, 寺内 大輔, 長山 弘

2 委員会からのお知らせ

1. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 小川 容子

2020年度第1回編集委員会（4月25日、Teams使用によるWeb会議）では、投稿原稿の採否について審議を行い、次の通り決定しました。『音楽教育学』に投稿されていた研究論文6本のうち、1本が採択、再査読が3本、2本が不採択となりました。『音楽教育実践ジャーナル』へは、特集に6本、自由投稿に9本の投稿があり、特集は5本が採択、自由投稿は5本が採択されました。編集委員会ではこれまでと同様、1本でも多く掲載したいとの思いで、委員全員で丁寧に議論を重ねております。しかし、学会誌への掲載には、研究内容の確かさ、論理的な文章展開が不可欠です。投稿される前に、指導教員にご相談されること、場合によっては研究仲間との読み合わせ等をお勧めいたします。

『音楽教育実践ジャーナル』通巻32号(2021年12月発行)の特集テーマ

次号の特集テーマは「新型コロナウイルス問題と音楽教育」（担当者：杉田・津田・吉永）となりました。コロナ禍における音楽教育のこれまでとこれからについて、多くの原稿の応募をお待ちしております。また、テーマにかかわらず自由投稿も歓迎いたします。
締切は2021年2月13日となります。

次回『音楽教育学』投稿締切

『音楽教育学』の直近の締切は、11月15日となっております。多くの方の投稿をお待ちしております。

学会誌への投稿がHPからできるようになります

現在、電子投稿システムを準備中です。9月ごろから、学会HPの会員個人専用ページ（マイページ）に新設される投稿窓口から投稿可能になります。投稿可能な原稿種類は、『音楽教育学』の「研究論文」「研究報告」、『音楽教育実践ジャーナル』の「自由投稿」「特集投稿」です。詳細については、学会のホームページ上でお知らせいたします。

なお、電子投稿の開始後12月ごろまでは、従来通り事務局への郵送による投稿も受け付けます。

2. 第16回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう！」

実行委員長 今田 匡彦

前回のニュースレターにてご案内した通り、2021年に日本での開催が予定されている APSMER 2021 TOKYO での英語による発表をサポートすることを主な目的として、2020年12月に第16回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう！」を、明治学院大学にて開催致します。現在、日本音楽教育学会内に設置された APSMER 大会実行委員会及び、APSMER International Board にて次期大会の開催方法等が検討されています。今回のゼミナールは APSMER 2021 TOKYO との連携を基盤としているため、詳細についてはオンラインによる開催の可能性も含め、現在若手会員を中心に計画中ですが、APSMER の進捗状況を踏まえ学会 Web サイトにて告知する予定です。

3 音楽教育の窓

〈連載〉音楽・教育・学校 (24)

1. 「在るものは無いもの…」—コロナ禍の下で考えたこと—

杉江 淑子 (滋賀大学名誉教授)

小学校に入学するかしないかの頃のおぼろげな記憶なので、1960年前後のことだと思う。ある日、夕食を済ませた後、父母から、これから出かけるけれど一緒に行く？と声をかけられ、付いていった。行き先は、自宅から1キロ半ほどの隣町にあった県立の高等学校。その図書室の近くの教室のような、小ホールのようなスペースだった。三々五々、大人たちが集まってくる(子どもは殆どいなかった)。自転車の荷台から風呂敷包みを大事そうに抱えて入ってくる人がいた。スペースには椅子だけが前方に向けて並べてあり、集まった人たちは自由に席をとり、静かに座っている。前には誰もいない。四角い箱のようなものが置いてあるのみだ。「いったい何が始まるのか？」とっていると、参加者の一人が少しだけ何か話し、それから音楽が鳴り出した。レコード・コンサートだったのである。

何の音楽が鳴っていたかは定かでない。私には鳴っていた音楽よりも、静けさの中で音楽だけが響いていたその空間、終わった後の大人たちの満足そうな表情と和んだ空気、そして持参したレコード(だったのだ!)を愛おしそうに再び風呂敷に包み、自転車の荷台に積んで会場を後にした一人の小父さんの姿が印象に残っている。人口1万に満たない地方の町の、何もない時代の小さな記憶である。

中学校時代、音楽室には、性能のあまりよくなさそうな小型のレコード・プレーヤーがあった。音楽室のレコードキャビネットに仕舞われていたレコードも数は多くなかったように思う。そのためか、鑑賞の授業は減多に行われなかったが、あるとき、めずらしく授業で音楽を鑑賞した。ベートーヴェンの第6シンフォニーである。レコード・プレーヤーがそんな状態なので、決して良い音ではなかったような気がする。私はただぼんやり聴いていた。しかし、隣のクラスの一人の男子生徒がその授業をきっかけにクラシック音楽にのめり込んだことを、後から知った。1960年代と言えば、日本の楽器製造販売会社が全国に音楽教室事業を展開し、私の暮らしていた田舎町にも小さな教室が1つ2つ開かれてはいた。それでも、地方の公立中学校の生徒の殆どにとっては、学校の音楽室が未知の音楽につながる唯一の場所だったのである。

翻って現在、音楽は聴こうと思えばどこでも聴くことができるようになった。街を歩きながら、ランニングをしながら、人々はイヤホンをつけ音楽を聴いている。学校の教室には視聴覚機器が整い、音声ばかりでなく、オーケストラの各パートの演奏の様子をズームアップした映像まで観ることができる。バレエでもオペラでも日本の伝統音楽の演奏でも映像付きで観ることができる。「あったらいいな」と思っていたものばかりだ。教材用CDには、オケ伴奏まで入っている。オンラインショッピングで、世界の民族楽器を手に入れることだってできる。満たされている。…しかし、ここで、ふと考える。本当に満たされているのだろうか、簡単には手が届かないからこそ希求する強い感情や憧れ、未知の音楽へと拓かれていく喜び、こうしたものは今、あるのだろうかと…。

レコード・コンサートの後の満足感に溢れた大人たちの顔、音楽室の小さなレコード・プレーヤーから音楽の世界にのめり込んだ中学生、60年代のこうしたできごとを思い出すと、こうした思いに囚われてしまう。だが、この3ヶ月余りに及ぶコロナ禍の自粛生活のなかで、満たされない時代の感覚が甦ってきた。そして、簡単には手が届かない大切なもの、それは人々の息づかいとともにある音・音楽の存在なのだということに、今、気付いている。学校の「音楽」の授業がその大切な存在を希求し続ける場として戻ってくることを、心から願わずにいられない。

2. 新型コロナウイルス感染症影響下での教育・研究機関等での取組み

新型コロナウイルスによる感染症感染拡大防止のため3月2日に突如として始まった休校措置以降、音楽に限らず、学校教育に限らず保育者・教育者・指導者が知恵を絞って、学習者の学びを保障しようと努めてきた。その一方で、日本国内の教育機関における ICT 環境整備の遅れや、地域・経済による教育格差の問題など、その課題も明らかになっている。まだまだ情報量が少ない中ではあるが、教育・研究機関から様々な形で発信された情報を収集した。7月25日現在収集できたオンライン情報、今後の関連学会の内容については以下のとおりである。

国立情報学研究所	
タイトル	4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム
URL	https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/
東京大学 東京カレッジ	
タイトル	連続シンポジウム「コロナ危機を越えて」
URL	https://www.tc.u-tokyo.ac.jp/archive/
東京学芸大学インキュベーションセンター	
タイトル	今、「つながること」をどう支えられるのか—臨時休校や解除後の「学校」と ICT の具体的な取り組み方について考える—
URL	https://www.u-gakugei.ac.jp/pickup-news/2020/05/post-664.html
立教大学経営学部中原淳研究室	
タイトル	そのとき学びに何が起こったか：高校生の学習時間に焦点をあてて—新型コロナ感染拡大による学習環境の変化に関する調査報告会— 当日配布資料
URL	http://www.nakahara-lab.net/blog/wp-content/uploads/2020/06/online_manabitomeruna2020-1.pdf
神戸大学	
タイトル	With COVID-19 シンポジウム「新型コロナと共存する社会を考える」
URL	https://www.youtube.com/watch?v=XW2w6fFifTE&feature=youtu.be
世界 OMEP 理事会	
タイトル	新型コロナウイルス感染症時代の幼児教育・保育の保障を
URL	https://53c6013f-2275-4358-b188-b99727ae0ec9.usfiles.com/ugd/53c601_11392d47eca04ef2a171b857f58f9472.pdf
The National Association for Music Education.	
タイトル	Fall 2020 Guidance for Music Education
URL	https://nafme.org/wp-content/files/2020/06/NAfME_NFHS-Guidance-for-Fall-2020.pdf
日本教育方法学会第 56 回大会 (2020.10.10 開催予定 於宮崎大学)	
タイトル	シンポジウム 危機的状況によって問われる授業と学力
タイトル	課題研究Ⅱ 授業のオンライン化は子どもの学びをどう変えるのか
URL	https://www.nasem.jp/
初等教育カリキュラム学会第 5 回大会 (2021.1.10 開催予定 オンライン)	
タイトル	シンポジウム「COVID-19 は学校教育をどのように変え/変えなかったのか—ICT との関係を変えて考える (仮題)」
URL	https://seec-web.com/

3. オンライン・シンポジウム「コロナ時代のアート」報告

早川 倫子 (岡山大学)

2020年6月21日の13:30~15:30に、東京大学芸術創造連携研究機構主催のオンライン・シンポジウム「コロナ時代のアート」が開催された。岡田猛氏・高木紀久子氏の企画のもと、新型コロナウイルスの影響が不確定な中、「いま」「ここで」アートは何ができるのか?というテーマで、話題提供やディスカッションが行われた。

最初に藤井慎太郎氏 (演劇・文化政策, 早稲田大学) は、パリ・オペラ座などの大劇場の公演中止等、この3月に身近で体験したことを報告し、芸術文化界の損失と今後の在り方について取り上げた。特に興味深かったのは、『距離』を再考するということである。舞台芸術の美学的条件 (無媒介性) 等を挙げた上で、今後、日常への距離の導入により、身近だった存在は遠くなること、オンラインの領域による距離の無化により、遠くにあった存在は相対的に近くなること、また空間だけでなく時間の感覚も狂うことによって生活のリズムに変化が生じること、他者との距離の受容が求められるようになること等、こうした影響を見極め『距離』を再考することが必要との考えが示された。

中村政人氏 (美術, アーツ千代田, 東京藝術大学) は、個人と都市の関係を新しく創造するアーツプロジェクトが必要であるとし、東京ビエンナーレの事例を紹介した。また、ポストコロナ社会において、新しい成長を促し意識改革するためには、多様なアーツプロジェクトを既存の社会資源にインストールしなくてはならないこと、そしてツリー型ではなくリゾーム型でお互いの成長に対してアフォーダンスされ自己組織化していく必要があると提案した。

尾竹永子氏 (パフォーマンス・アーティスト) は、これまでも、エイズ問題や9.11, 3.11等の揺れ動く時代のなかで、できないことを捕まえながらできることをする=工夫することでパフォーマンスを成り立たせてきた事例を紹介した。その中で、「distance (距離) は実際には変えられないが、感覚的には変えられる」というテーゼのもと、距離をどう埋めるか、違うところ (場所) のものを自身の身体と一緒にいかに持つて来ることができるかを考えているとのことで、今後も劇場やギャラリーが開かなければ、自分の身体または作品 (本来のものではないけれど写真や映像を含めて) を可能な場所へ持っていき、実際にどこかに来て観てもらおうことのできる場所を作りたいと述べた。

寛康明氏 (メディアアート, 東京大学) は、素材、技術、空間のインターアクティビティという視点をもとに、「外から・後からミュージアムを鑑賞する」、「作品がミュージアムを飛び出す」、「みんなが『作品』を作るようになる」という、コロナ時代のアートの可能性を説明した。既存の施設にバーチャルにアクセスできるバーチャル・ミュージアムや、ミュージアムを飛び出した街の中のアートの存在、作品の鑑賞から作り方の共有もできるオンラインでの可能性について、テクノロジーとの関連から事例紹介があった。

オンラインという制約と時間的制約もあり、その後のディスカッションでは、先に踏み込んだ検討が難しかったが、このシンポジウムに参加して、単にコロナ禍での代替え案を見つけるという方向性で考えるのではなく、アートの本質を捉えながら、アートと人の関係、さらには社会と人や、人と人とをアートがどうつなぐのか、といった関係性そのもののあり方を再考する機会として捉えることが必要であると考えられた。特にアートにおける「距離」については、今後様々な側面から考察してみたい。

4 会員の声

限られた状況でもできることを探して

阿部 綾梨 (札幌市立簾舞中学校)

札幌市では、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、新学期が始まって約1週間で臨時休校になりました。私は、この春に北海道教育大学大学院を修了し、昨年度から勤務している札幌市内の中学校に4月から新採用として勤務しています。大学院では中学校音楽科における創作活動を取り入れた合唱の授業開発について研究していました。今年度から本学会の会員となり、今後も現職として研究を続けていくつもりでしたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため授業で歌うことができず、今年度は残念ながら大学院での研究成果を生かした実践はまだ行えておりません。

この原稿を執筆している7月現在は、6月からの少人数短時間登校を経て、対策をとりながらも少しずつ通常の学校生活へと戻っているところです。私が勤務している中学校では、音楽科を含めた数教科で少人数授業を継続し、音楽科では1・2年生は創作、3年生は鑑賞の授業を行っています。

1年生の創作については、教科書をもとに個人でリズム創作を行っています。言葉のもつ音の長さを生かしてリズムをつくり、身の回りにあるものを使って実際に演奏しながら工夫を深めていく学習です。まずは4分の4拍子2小節のリズムをつくり、教師が提示した全員で演奏する4分の4拍子2小節のリズムを挟みながら一人ずつ自分がつくったリズムをつなげて演奏しました。生徒たちは、言葉からリズムをつくり、実際にそのリズムを叩きながらその音の長さを吟味し、4分の4拍子2小節の中で言葉をどう組み合わせるか、どう繰り返すか考えていました。また、そのリズムを身の回りのものを使って音を出すために筆箱のあらゆるものを取り出して叩いて試していました。「先生！規定でこんな音が出たよ！」「ペンを2本使ったら違う音になる！どっちも使いたいな…」などという生徒の声を聞いて、音そのものを出す楽しさを実感しながら創作をしていることがわかりました。今後も生徒が音そのものを楽しみながら創作活動できるよう進めていきたいと思っています。

2年生の創作については、音階を生かした旋律をつくる学習をしました。学級を半分に分けて授業を進めているので、幸いなことに箏を一人1面使うことができました。そのため、生徒が主体的に音を出しながら試行錯誤する様子が見られました。加えて、感染症対策を十分にとりながらも、創作活動の中で何人かの生徒の作品を全体で取り上げてその生徒に工夫したことを説明させることで、他の生徒もより工夫を凝らして作品をつくることができていました。できる範囲で生徒の考えを表出させることで、生徒同士がそれぞれの発想に刺激を受けながら学びを深めることができていました。少人数で授業をすることによって、生徒一人一人が納得できるまで箏で音を出しながら試行錯誤でき、イメージを広げながら考えを深めて曲をつくることができていました。

このように、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止によってできることが制限されていても、生徒は学ぶ意欲をみせ、音楽を楽しんでいました。飛沫感染のリスクが高い音楽科は、多くの制限がかけられているのが現状です。しかし、私はできる限り生徒たちが音楽を楽しんだり、音楽のよさに触れられたりできる授業をしていきたいと考えています。現在は、今まで学んできたことをふまつつも、さらに情報収集し、そこから現状でもできる授業を模索しながら実践しています。これからより生徒が音楽を楽しみながら学べるよう本学会の様々な研究や実践から学び、限られた状況でもできることを探しながら、生徒の実態に合わせて授業実践を行っていきたいです。

5 会員の新刊・近刊等紹介

- ★芳賀 均／伊藤 秋梨 著『リズム学習ゲームをつくる』 文芸社 2020/2/1 四六判・192頁 ISBN：978-4-286-21411-5 [本体1,500円＋税]
リズムを読むトレーニングを楽しみながら行うにはどうしたらよいか、という課題意識をもって、大学教員と学生が教材や教具の制作に取り組んだ2年間の記録と、成果物（ゲームカードの実物）。
- ★芳賀 均／森 健一郎 著『楽しい合科的学習の実践—音楽と他教科の合科・STEAM教育を考慮した教科横断的な学習—』 文芸社 2020/4/1 四六判・156頁 ISBN：978-4-286-21622-5 [本体1,500円＋税]
STEAM教育を考慮した学習、プログラミング的思考や表現力を養う活動、音楽と国語、音楽と体育を組み合わせた学習を取り上げた。変化の激しい時代の学習として、また、地方創生にも一役買う。
- ★本多 佐保美 編著『日本音楽を学校でどう教えるか』 開成出版 2020/4/1 B5判・107頁 ISBN：978-4-87603-525-0 [本体2,000円＋税]
志民一成、山田美由紀、長谷川慎、大田美郁他による日本音楽各種目についてのわかりやすい概説と、千葉、静岡、埼玉各地で積み重ねてきた豊富な実践事例を収載。「日本音楽を学校でどう教えるか」日々、考えている先生方にぜひ手にとっていただきたい一冊。
- ★津田 正之／酒井 美恵子 編著『学びがグーンと充実する！小学校音楽授業プラン&ワークシート』低学年・中学年・高学年 明治図書出版 2020/4/27 B5判・104頁 ISBN：(低)978-4-18-351417-2 / (中)978-4-18-351511-7 / (高)978-4-18-351615-2 [本体2,000円＋税]
新学習指導要領に対応した各巻36の授業プラン（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞、英語の歌など）とそのままコピーできるワークを掲載。優れた音楽教育の研究者の皆様が執筆してくださったおかげで、授業ですぐに役立つ書籍となっている。
- ★今川 恭子 編著、志村 洋子／小川 容子／市川 恵／丸山 慎／伊原 小百合／小井塚 ななえ／石川 眞佐江／二俣 泉／本多 佐保美ほか 著『わたしたちに音楽がある理由（わけ）—音楽性の学際的探究—』 音楽之友社 2020/6/16 A5判・326頁 ISBN：978-4-276139107 [本体3,500円＋税]
人が人として生きる根底に音楽はある。生物学、脳科学、発達心理学、文化人類学など学際的な著者たち（香田啓貴／関義正／藤井進也／蒲谷慎介／高田明ほか）が、最新の知見と共に音楽性に迫る。

6 報告

2020年度 日本音楽教育学会 第2回常任理事会

日時：2020年7月25日（土）13:30～16:00

場所：Web会議

出席者：今川、本多、木村、石上、小川、小畑、榎藤、齊藤、嶋田、杉江（記録）、水戸

【会務報告】〈2020年4月25日以降〉

4月25日 2020年度第1回編集委員会（Web会議）

5月18日 ニュースレター第80号発行

6月15日 第51回大会発表申込・要旨締切

7月25日 2020年度第2回常任理事会（Web会議）

【メール審議の報告（理事会・常任理事会）】（2020年4月25日以降）

- ・第51回大会につき、参加者、発表形態、「研究発表応募要領」及び「発表に関する内規」、大会実行委員会組織、大会参加費、日程（タイムスケジュール）の承認
- ・第51回大会へのKMES招待取り止めについての報告・承認
- ・「音楽教育支援プロジェクトチーム」の立ち上げについて承認
- ・新入会員及び退会者について、正会員新入会25名、申出退会6名、自然退会24名の承認 他

【審議事項】

1. 新入会員及び退会者について（木村）

6月5日理事会ML承認以降の正会員新入会13名、申出退会1名について報告、承認された。
（2020年7月25日現在、正会員1,580名、学生会員1名、名誉会員2名、特別会員3名）

個人情報保護のため削除しました

2. 2020年度補正予算について（杉江）

オンライン大会開催、7月25日現在の会員数実数を反映させた補正予算について、承認された。

3. 2021年度予算について（杉江）

7月25日現在の会員数実数を反映させた2021年度予算の説明があり、承認された。

4. 第51回大会について（報告も含む）

(1) 大会実行委員会より（今川）

これまで経験のない形態での大会開催の成功に向け、新たに立ち上げられた実行委員会において、「ニュー・ボーダーレスをめざして」の趣旨の下、鋭意準備が進められているとの報告があった。

(2) 事務局より（木村）

大会スケジュール、今後の予定等の報告があった。発表件数は81件、12会場での発表となる。

(3) オンライン開催方法について（齊藤）

作業の推進日程、Zoomの契約台数（口頭発表12、事務連絡専用ミーティングルーム及び予備ルームを加え、計15部屋）、プロジェクト研究及び総会時にYouTubeをZoomと併用すること等が報告された。大会プログラム発送時に「オンライン大会のご案内」を同封し、大会参加のイメージをわかりやすく伝える。総会の開催や資料閲覧の方法、セキュリティ対策等については引き続き検討するとともに、オンラインでの発表資料の取扱いに関する注意を周知する。

- (4) 大会専用ホームページについて (塚原・長山→齊藤)
 本学会 Web サイト, 申し込み用 Web サイト (東武トップツアーズ), 「第 51 回大会オンライン大会専用 Web サイト」から大会専用ページへのログイン方法について説明があった。
- (5) 常任理事会企画プロジェクト研究について (石上)
 「小・中学校の連携を踏まえた音楽科授業の実践研究 I—音楽づくり・創作における学びの探究—」について, コロナ禍による制約条件の下であるが, 研究班, 実践班において着実に進められていることの報告があった。授業の動画資料等の掲載方法等, 引き続き検討されることとなった。
- (6) 会長諮問に基づく緊急プロジェクトチーム企画について (今川・齊藤)
 新型コロナウイルス感染症の影響下における音楽教育について, 「予測困難な時代と音楽教育」と題し, ポストコロナ後も見通しつつ議論を深める計画で準備を進めていることの報告があった。
- (7) 会計について (國府→杉江・木村)
 2020 年度補正予算案審議に先立ち, オンライン大会の経費見積りの報告があり, 承認された。
5. 第 16 回音楽教育ゼミナールについて (今田→木村)
 2020 年 12 月に第 16 回音楽教育ゼミナール「英語で研究を海外に発信しよう!」を明治学院大学で開催予定であることが報告された。オンライン開催の可能性も含め詳細は学会 Web サイトに掲載。
6. APSMER 2021 TOKYO について (水戸)
 開催候補日程を 2021 年 9 月 18 日・19 日の 2 日間 (予定), 会場を明治学院大学とし, 対面, オンライン, あるいは両者併立での可能性を検討中。8 月上旬に小委員会を開催予定。
7. 理事の被選挙権について (嶋田・齊藤)
 理事選挙候補者の年齢規定等について, 修正案が再提案され, 審議の結果, 候補要件の記載順序や文言を一部修正した上で, 次回理事会に提案することとなった。
8. 電子投稿について (小川・杉江・事務局)
 学会誌の電子投稿システムの構築がほぼ完了し, 9 月から試行的に使用開始となることの報告があり, それを受けてシステム構築に係る経費支払いの執行が会計担当理事より報告され, 承認された。
9. ニュースレターのペーパーレス化について (権藤)
 広報委員会での検討結果について報告があり, 紙媒体の発送 2 回 (第 2 号・第 4 号) とオンラインのみ 2 回 (第 1 号・第 3 号) の年 4 回発行とすることが提案・承認された。総会で報告の予定。

【報告事項】

1. 各委員会等報告

- (1) 編集委員会 (小畑・本多)
 『音楽教育学』第 50 号第 1 号は投稿論文 2 本, 書評 1 本, 地区例会報告 7 本の掲載となり, 8 月 31 日に発行予定, 5 月 15 日締切の『音楽教育学』への投稿は研究論文が 6 本, 書評が 1 本, 2021 年 12 月発行予定の『音楽教育実践ジャーナル』19 巻 (通巻 32 号) の特集テーマが「新型コロナウイルス問題と音楽教育」に決定したことの報告があった。なお, 本多副会長から, 『音楽教育学』の投稿論文についての臨時委員会における審議結果の報告があり, 承認された。
- (2) 国際交流委員会 (水戸)
 APSMER の開催について, 日程については明治学院大学の次年度の行事予定が決定されるまでは暫定的日程であること, 韓国との連絡等が委員の尽力により円滑に進んでいるとの報告があった。
- (3) 広報委員会 (権藤)
 ニュースレター No.81 の発行計画について, 資料にもとづき報告があった。
- (4) 音楽文献目録委員会 (長野→木村)
 第 183 回音楽文献目録委員会メール会議 (2020 年 4 月 27 日) に基づき, 国際版 RILM Abstracts への文献登録完了 (383 件), 紙ベースの発行を次号で終了とし, 電子化することの報告があった。

〈次回会議の予定〉	第 3 回常任理事会	10 月 16 日 (金)	12 時~13 時	オンライン (Zoom)
	第 2 回理事会	10 月 16 日 (金)	13 時~14 時	オンライン (Zoom)

7 事務局より

事務局長 木村 充子

1. 第51回大会オンライン大会について

- ・本大会への参加は、「申し込み用 Web サイト」<https://sec.tobutoptours.co.jp/web/evt/51ongaku/> (学会 HP よりアクセス可) での事前申し込み (参加申込〆切: 10月3日(土)15時) のみ受け付けます。当日参加は一切受け付けませんのでご注意ください。
- ・大会参加費は、2,500円 (支払い〆切: 10月5日(月)) です。支払い方法については「申し込み用 Web サイト」をご覧ください。
- ・大会に関するお知らせは、「第51回大会オンライン大会専用 Web サイト」(学会 HP よりアクセス可) にて随時ご確認ください。事前申し込みと参加費の入金をいただいた方は、当サイトにて10月10日(土)より Zoom の専用 URL をご確認ください。
- ・参加申し込み後のキャンセルおよび返金はできません。
- ・今大会は非会員 (臨時会員) の参加は受け付けません。
- ・総会の出欠については同封のハガキにご記入の上、10月9日(金) 必着でお知らせください。総会に欠席される方は、必ず委任状に必要事項をご記入ください。

2. 「会員個人専用ページ (マイページ)」メールアドレス登録のお願い

ご承知の通り、すでに会員情報の変更等の諸手続きは、すべて「会員個人専用ページ」(マイページ) からご自身で行っていただくことになっています。これに加えて編集委員会と事務局では、「会員個人専用ページ」から電子投稿するシステムを現在 (本誌編集時点) 準備中です。このシステムの稼働後、学会誌への投稿は、一部の原稿種類を除いて、電子投稿が可能となります (p4「学会誌への投稿が HP からできるようになります」参照)。メールアドレスの登録、個人専用ページへのログインの確認をしてくださるようお願いいたします。

3. 学会誌バックナンバー販売について

学会誌バックナンバーを特別価格で販売中です。詳細は学会 HP をご覧ください。

4. 事務局開局について

新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、事務局に原則としてスタッフは出勤しておりません。ご用件はEメールにてお願いいたします。お返事までに数日かかることがあります。ご了承ください。

..... 【編集後記】

新型コロナウイルス感染症の影響が再び拡大するとともに、7月には各地で豪雨の被害が続きました。被災された方々に謹んでお見舞い申し上げます。ニューノーマルが叫ばれ、音楽活動も新たな方法が模索されています。学会大会も今年は例年と形態が大きく異なります。このような時期だからこそタイムリーな情報をお届けすると共に、会員の交流の場となるよう、広報委員一同努めて参ります。皆様からもたくさんのご投稿、お願い申し上げます。 (村上 康子)

投稿先アドレス (半角で) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

【日本音楽教育学会事務局】 ※新型コロナウイルスの影響拡大に鑑み、事務局開局の状況が不規則となる場合があります。

所在地: 〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206 Tel. & Fax. : 042-381-3562

E-mail: (半角) onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私 書 箱: 〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26*郵便物は私書箱へ

開局日時: 月・水・木 9:00 ~ 15:00 事務局員: 亀山・若尾・宇田川・徳山